

〈資料〉 幼児の言語発達 (I)

— 2才児の観察による発話事例研究 —

岡 部 毅

〈緒言〉

幼児の言語発達についての研究は多くある。それらによれば、たとえば、
発音の発達においては、幼児の構音器官が未熟なために、音の転置(テガミ→テミガ、
コドモ→コモドなど)、音の変化(カイダン→カイラン、ライオン→ダイオンなど)、音の脱
落(オミヤゲ→オミゲ、ヒコーキ→コーキなど)の幼児語が存在する。

文の発達においては、1語文から2語文、多語文へと、年令とともに文の長さは長くなり、
構文的には、単純な不完全なものから、重文、複文などの複雑な文があらわれるよう
になり、文として整ったものへと変化してくる。文の機能においても、幼児の未分化な心
性を反映した感嘆文的発話の優勢から、だんだんと命令文的発話や陳述文的発話あるいは
疑問文的発話があらわれてくる。

語彙の発達においては、幼児語(ワンワン、ブーブーなど)の存在—消失、語彙の増加、
品詞の分化などが存在する。

以上簡単にみたような幼児の言語発達にみる諸特徴は、私達が日常幼児と接していれば、
非常によく実感として理解することのできる特徴ばかりである。

しかし、語彙の発達の中で語彙の増加について、たとえば、次のような久保(1922)、ス
ミス、M. E (1926)の資料がある。

表1 語彙の増加(久保, 1922)

年 令	使 用 語 彙		
	人 数	語 数	増 加
0:08			
0:10			
1:00			
1:03			
1:06			
1:09			
2:00	1	295	
2:06			
3:00	1	866	591
3:06	1	1211	325
4:00	1	1675	464
4:06			
5:00	1	2050	375
5:06			
6:00	1	2289	239

(縦断的研究)

表2 語彙の増加(スミス, M.E. 1926)

年 令	理 解 語 彙		
	人 数	語 数	増 加
0:08	13	0	
0:10	17	1	1
1:00	52	3	2
1:03	19	19	16
1:06	14	22	3
1:09	14	118	96
2:00	25	272	154
2:06	14	446	174
3:00	20	896	450
3:06	26	1222	326
4:00	26	1540	318
4:06	32	1870	330
5:00	20	2072	202
5:06	27	2289	217
6:00	9	2562	273

(横断的研究)

このような資料を手にしたときに、「語彙が年齢とともに増加していく」ということは、実感として理解できるが、しかし2才で300余り、3才で900余りも言葉を使用できるとは、どうも実感として理解できない。言葉をかえていうと、その資料を信じるしかなく、その理解にどうも不安がともなう。本当に2才、3才でそんなに沢山の言葉を使用するのだろうか。

本稿の主目的は、この実感のともなわない不安な理解を、幼児の観察を通して、どのような語彙をそれほどに使用するのかを確認して、実感のともなう理解へと高めることである。付随的には、本観察対象児の母親は外国人（多少の日本語はできる）であるために、日本語の言語発達に遅れはみられないかどうか、どのような言語発達の過程をたどるのかをみていくための一資料とするためである。

〈方法〉

観察児：S.52.10.13生。2980グラムで正常出産。女。姉妹兄弟なし。1:03（1才3ヶ月、以下同様の表示法を使用する）で歩行開始。1:07でケイレン発作のため、10日間入院。1:10～1:11の約2ヶ月間余り外国に滞在し、異言語の中で生活。2才の誕生日頃に歩行がほぼ完成して安定する。母親は外国人。

観察日：S 54.12.4～S 54.12.10。

方 法：発話の直接聞き取りによる方法とテープによる発話の聞き取り法との併用。

〈結果と考察〉

I 語彙の発達について

(1) 語彙量：使用した総語彙を、活用しないものと活用するものに分類したものが表3である（表3は構音については、ほぼ無視して整理した。表中のカッコ内のアルファベット文字は正しく読みができるものである）。

総語彙数581（活用しないもの377、活用するもの204）。語彙量は、2:02で581を使用し、久保(1922)、スミス.M.E.(1926)のデータを実感として確認することができた。

また本児は、1:03で歩行を開始し、1:07で10日間入院し、歩行能力が停滞、逆行し、やっと2:00の頃歩行が安心して見ておられる状態になった。本児の以前の使用語彙数は、1:05で13、1:06で21、1:07で39であった。スミス.M.E(表2)によると、1:06で22(2:00で272)であり、本児はこれまで平均的な語彙獲得数を示していた。このことを考えると、語彙量の増加は運動能力の発達と密接な関係があるといわれるが、歩行開始期には言語活動は停滞し、歩行が習慣化すると再び言語活動が活発化することを本資料およびスミス.M.Eなどの資料は示唆している。

(2) 品詞の分化：2才までにはほぼ全ての品詞があらわれるといわれるが、表3にみるように、名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞（表3では、動詞の中に含めた）、副詞、接続詞、助詞、感動詞とほぼ全てあらわれ、名詞(57%)、動詞(助動詞を含む。29%)が圧倒的に多い。特に動詞の変化(終止形、連用形、過去形)が顕著である。しかし、未然形(アソボウのみ)、連体形(シランコトのみ)、命令形(トマレのみ)、未然形(アソボウのみ)は全く初期の段階で、仮定形はまだである。

また、本児の非常に特徴的なことは、ラ行終止形の動詞の否定形をつくる場合に、イル

表3 使用語彙一覽表

活用しな	家 食 物 関 係 (71)	動 植 物 ・ 自 然 関 係 (48)	乗 物 ・ オ モ チ ャ 遊 び 関 係 (46)	形・色・時間・場所関係(2)	
い も の (330)	<ul style="list-style-type: none"> • イエ、イス、ウタ、オウチ、オサラ、オント、オマル、オチャンコ、オネンネ、オンガク • カーチン、カイダン、カサ、ガツコウ、コタツ、コップ、ゴミン • サラ、スプーン • タオル、タバコ、トイレ、チャウ、ツクエ、テレビ、デンキ、デンチ、デンワ、デガミニューズ • ハコ、ハシ、ヒ、フトン、フロ、フランズ、ベツト、ベントウ、ホウチヨウマクラ、ミン、モウフ • ラジオ、レイゾーゴ 	<ul style="list-style-type: none"> • アカチヤン、アラン(ALAIN)、エディーサン、アンザイサン、オイシヤサン、オトウサン、オカーサン、オトコ、オトモダチ、オトノサマ、オジチヤン、オジーチヤン、オネーチヤン、オニ、オニーチヤン、オバチヤン、オバチヤン、オンナー、オヒメサマ • キンタロー、コドモ • サンドラ、シヤ、センセイ • タケチヤン、デルフィン、デティ(DETTY)、トノサマ、トモダチ • ナオミ(NAOMI)、ニコラ(NICOLAS) • ナオミチヤン、ネエーチヤン • ヒカル、パパ(PAPA)、パピー(PAPY)、ファイト、パトリス(PATRICE) • ママ、マモン(MAMMAN)、マミー(MAMY)、マリコチヤン、ミツカゲ、モモサン 	<ul style="list-style-type: none"> • アメ、イシ、イス、ウサギ、ウシ、ウマ、オウマ、オサカナ、オニ、オサル、オゾウサン • カエル、カバ、カラス、カンガルー、キ、キジ、キリン、コケコッコ、クマ、カメ • サカナ、サクラ、サル、ゾウ • タコ、タヌキ、チューチュ、チューリップ、チヨウウチヨ、トリ、ドウブツエ、ドンブリコ • ネコ、ネズミ • ハト、ハナ、ハツバ、バラ、パンダ、ビービー、ブタ、ベバ、パカバカ • ヤマ • ラクダ、ライオン、リス 	<ul style="list-style-type: none"> • オキガエ、オシメ、オシメカバ、オポーシ • カップ、クツ、クツシタ、コート • スカート、ズボン、スリッパ、シヤツ、セーター • タイツ、ツツカケ • ネクタイ、ネックレス • パジャマ、ハラマキ、ハンカチ、ハンツ、フク、プラウス、ボタン、ボシ • メガネ • ワンピース 	<ul style="list-style-type: none"> • アオ、アカ、アシタ、イツシヨ、ウエ、オレンジ、アサ、オワリ • キイロ、キノウ、クロ、ゴカッケイ • サンカク、シカク、シタ、シロ • チヤイロ • ピンク • マル、ミドリ、ムラサキ

感動詞関係 (12)	副詞関係 (5)	助詞関係 (6)	接続詞関係 (1)	代名詞関係 (7)	数詞関係 (16)
<p>その他 (47)</p> <ul style="list-style-type: none"> • アリガトウ、ウン • ゴメンナサイ、コンニチワ、コンパ ンハ • ドウゾ • ハイ、バイバイ、ボンヌイ、ボンジュール • モシモシ • ヨイシヨ 	<ul style="list-style-type: none"> • ゼンブ • マダ、マダ、モウ • ドウ 	<ul style="list-style-type: none"> • ト、ダケ • ノ、ニ • バカリ • モ 	<ul style="list-style-type: none"> • ソレカラ 	<ul style="list-style-type: none"> • アンコ、アツチ、アレ • コツチ、コレ、コンナ • ドコ 	<ul style="list-style-type: none"> • アー(A)、イチ、イッカイ、イッパイ • ゴ • サン、シ、セー(C) • デー(D) • ニ • ヒトツ、フタツ、ペー(B) • ミッツ、ヨッツ、ロク
<p>活動用するも (166)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • アケテ、アケラン、アカン、アンブ、アンボウ、アラウ、アラッテル、アルク、アルカン、アル、アツタ、イル、イナイ、イル、イラン、イク、イコウ、イケラン、イッタ、イッテル、イカン、イレル、イレダ、イレテ、イレトク、イイマシタ、ウタウ、ウマレタ、オク、オクツタ、オイテ、オイトク、オチル、オチタ、オル、オラン、オンブスル、オチヤンコスル、オネンネシタ • カウ、カツテク(カ)、カク、カラン、カケテ、カケテ、カエラシ、カエラシ、カエツタ、カケテ、キク、キタ、キル、ゴジゴジスル、クダサイ、クレタ、ケシテ、コワレタ、コワシタ、 • サンボイコウ、サガス、サガサン、サガシテル、シツテル、シラン、シラント、シタ、シナイ、シテ、シメテ、シメラシ、シャブル、スル、スンダ、スベッタ、センタクスル、ソウジスル • タタンテ、タイタ、タツタ、ダツコスル、タベル、タペタ、ダシタ、ダシタ、チガウ、チヨウダイ、チヤンコスル、ツクル、ツクツタ、ツクツテ、ツナイテ、ツイタ、ツケル、ツレテイッタ、デキル、デキラン、テル、テタ、テテキタ、ドーンシタ、トツテ、トレン、トマレ、トマツタ • ナイ、ナカツタ、ナクツタ、ナイナイスル、ナイナイシタ、ナク、ナカン、ナラン、ヌグ、ヌゲン、ヌツテ、ヌレテル、ヌレタ、ネル、ノツテル、ノシタ、ノシテ、ノル、ノラン、ノム、ノンダ、ノマン、ノンデル • ハイル、ハイッダ、ハイラン、ハイチ、ハカン、ババイスル、ハシレ、ハナシスル、ハナシテ、フイテ、ペンキヨウスル、ホス、ポトンスル • マウス、マワツタ、マチガツタ、ミル、ミタ、ミレル、ミラン、ミシケタ、モツ、モツテル、モツタ、モッタ、モツテ、モツテクル、モツテイタ、モラウ、モラツタ • ヤブレタ、ヨカッタ、ヨンテ • ワスレタ 	<ul style="list-style-type: none"> • アツイ、アツタカイ、ママイ、アブナイ、イイ、イタイ、オオキイ、オオキク、オッキイ、オイシイ、オソイ、オモシロイ、オモタイ、オナジ、オンナジ • カライ、カワイイ、キレイ、クサイ • サムイ、スイ、スッパイ、スキ • タカイ、ダイジ、ダイスキ、チイサイ、チツチャク、チイサク、ツメタイ • ナガイ、ニガイ、ヌクイ • ハヤイ、バチッコ、ヒクイ、ベツ 	<p>形容詞関係 (38)</p>		

→イラン、オル→オラン、ハイル→ハイランなどの正しい語尾変化の場合（ラ行終止形の語幹+ラン）を般化させて、再々誤った否定形、カケル→カケラン、シメル→シメラン、アケル→アケラン、デキル→デキラン、タベル→タベランなどをつくることである（表3参照）。

形容詞の変化、形容動詞はまだあらわれていない。

助詞については、列挙するさいの「と」（パパとママ、ゴハンとオスープなど）、所有・所属をあらわす「の」（パパのシンプン、ナオミチャンのおモチャなど）の使用を目立ってするようになった。

接続詞では、やっとな順接の「ソレカラ」のみがあらわれているにすぎない。

また、興味あることは、同一語彙の多義的使い分け、たとえば、アメ（お菓子）↔アメ（雨）、イル（居る）↔イル（必要だ）——これらにはイントネーションの違いがある——、イッショ（と一緒に）↔イッショ（と同じ）、カエル（替える）↔カエル（帰る）↔カエル（蛙）、ハイ（どうぞ）↔ハイ（yes）——イントネーションは蛙（カエル）を除いて同じ——などの分化を示し始めていることである。

II 発音の発達について

(1) 構音：構音についての分析が目的ではなかったもので、表3においては構音については無視したが、観察を通してみると、

破擦音ツ（クツ→クチュ、ツクエ→チュクエなど）、サ行摩擦音（サトウ→シャトウ、クツシタ→クツチタ、スル→シュル、センセイ→シェンシェイ、ソバ→ショバなど）、ラ行弾音（ラーメン→ダーメン、カルピス→カーピス、ワスレタ→ワシユデタなど）などに目立った未熟な構音を示した。

(2) 幼児音：構音器官の未熟のための幼児音、つまり、音の転置（パカパカ→カパカパ、コドモ→コモドなど）、音の変化（サカナ→シャカナ、ライオン→ダイオンなど）、音の脱落（アリガトウ→アガトウ、ヒコーキ→コーキなど）が顕著にみられた。

また音の転置、変化、脱落が複合してもよくあらわれる（テガミ→テミゲ、テツボウ→オテピツなど）。音の変化、脱落については、構音困難な音が変化・脱落するようである（注：幼児の75%が構音可能となるのは、破擦音ツ、ジ以外のザ行破擦音で5才前半、摩擦音シは4才前半、他のサ行摩擦音は5才後半、摩擦音ヒ、フは3才前半、他のハ行摩擦音は4才前半、ラ行弾音は5才後半である：梅林・高木、1965；安田、1966）。

III 文の発達について

(1) 文の長さ：30分間の親子間の遊びの中の発話を1日2回、3日間（12月8・9・10日）にわたってテープに録音した。発話分析は、村田（1961a）の自立語、付属語による連語発話の分析をおこなった。その結果は表4である。

表4 発話の連語分析

連語数 日時	1	2	3	4	5	6	計	平均 連語数
I 12月8日	217	57	7	2	2		285	1.3
	223	62	20	3			308	1.4
II 12月9日	235	65	14				314	1.3
	316	115	26				457	1.4
III 12月10日	220	58	18	1		1	298	1.3
	178	57	11				246	1.3
計	1389	414	96	6	2	1	1908	1.3

スミス、M.E (1935) の対成人の発話の連語分析 (1:06-1.3連語、2:00-2.1連語、2:06-2.8連語) との比較、牛島・森脇 (1943) の子ども同志の発話の分析 (1:06-男1.1、女1.4、2:06-男3.1、女2.8) との比較においては、本児の文の長さは少し短いようである。

(2) 文の機能：平均連語数が1.3~1.4からわかるように、まだ一語文が大半をしめていて、感嘆文的発話と陳述文的発話の区別がつけにくいことが多いが、次第に命令文的発話 (要求的発話として、パパ コレ シテなど) や陳述文的発話 (パパ チュケモン アルなど) が優勢になりだし、疑問文的発話はほとんどない (ドコ イッタン、ドウシタのみ)。

大久保 (1965) の娘の疑問表現の発達によると、ナニ (第一期のナニ) (1:08)、ドコ (1:08)、ダレ (1:11)、カ、デショの文末出現 (2:00)、ドレ (2:01)、ドウ (2:03)、ドンナ (2:03) が観察され、シュテルン、C&W (1907) の娘によると、コレ ナニ (1:06頃)、ナニ (1:06頃) が観察されたという。しかし、本児の観察では、「コレ」の連発、「アレ」の連発 (コレ コレ コレ、アレ アレ アレ)、「ドウシタ コレ」の連発 (ドウシタ コレ ドウシタ コレ) をし、疑問表現をしているような場合があるが、はっきりした疑問詞、助詞 (カ、ノ) を使った疑問表現はまだほとんどみられず、まだ質問期 (1才半~2才頃とされる) には入っていないようである。

些細な問題意識 (本当に2才児で300余り、3才児で900余りも言語使用をするのだろうか) から観察を始めたが、自分の不安な理解を確しかな実感のともなった理解に高めることができたこと、また、幼児期の言語発達の特徴を自分の資料で確認したことは有意義であった。また今後本児は二重言語、多重言語の生活をしていくであろうから、縦断的な観察を続けていきたいと思っている。

参考文献

- ・古浦一郎編 最新児童心理学 誠信書房 1972
- ・岡部弥太郎・沢田慶輔編 教育心理学 (新版) 1974
- ・藤永 保編 児童心理学 有斐閣 1975
- ・築島 裕著 国語学 東京大学出版会 1977